

秋田弁噺

いなかのばっばのはなしっこ

佐藤 弘

(昭和40年機械科卒)



【その3、屋敷蛇の不思議】

これは、ある農家の屋敷を建て替えた時にあった不思議なお話です。

孫六の家では、築80年の母屋の老朽化が進んだため、思いきって建て替えることになりました。旧宅を解体し、新しい家を建てるのに約半年を要するため、その期間は母屋の隣の納屋で生活することになりました。引っ越しをした翌日、朝目が覚めると、一家は大変びっくりしました。枕元の座布団に、大きな青大将がとぐるを巻いて鎮座していたのです。当主の輝男が、気味が悪いと言って箒で叩いて追っ払ってしまいました。ところがその翌日も朝目が覚めると、おなじ所にまた青大将がとぐるを巻いていました。輝男はまた箒で追っ払ってしまいました。しかし、青大将は何回追っ払っても毎朝必ずおなじ場所にとぐるを巻いていました。輝男はもともと大変な短気で乱暴な人でしたので、「これだばちらましね!! 気持ち悪くてなもかもなね!!」とばかりに棒っきれでたたいてその蛇を殺してしまいました。そして死骸は家のすぐ下の川原に捨ててきました。それから半年が経って、新居が完成し、一家はそちらに移り住みました。

輝男のお母さんのクマ婆さんが病気で倒れたのはその3ヶ月後のことです。便秘気味だと言って医者から下剤を処方されては、今度は下痢が続いていたのですが、精密検査の結果直腸にガンがあることが分かり、入院して直腸を切除し、人工肛門を取付けました。その後自宅療養をしていたのですが、腹痛が激しくなり、検査の結果、ガンが大腸や他の臓器にも転移していることが判明しました。もはやこれは末期ガンで、これ以上の手術は効果がありません。「余命は6ヶ月でしょう。」という主治医の診断を受けて、クマ婆さんは自宅に帰って療養することになりました。クマ婆さんは次第に弱り始め、やがて自分では歩くことも、布団から自力で起き上がることや自分で食事を摂ることもできなくなりました。そんなある日、夕食が済んだ

ころ、クマ婆さんが「輝男、ちょっとこっちさ来エ」といつになく大きな声で輝男を呼びました。輝男が嫁の和子と行ってみると、自力で起き上がることもできないはずのクマ婆さんが、背すじをスッと伸ばして布団の上に座っていました。そして輝男を睨みつけて「おまえは、あの小屋(納屋)の蛇殺したべ。あれだば屋敷蛇っていつてオラエのえ(家)を守ってけで(くれて)いた蛇だ。なんとそれ殺してしまったもんだもの、その祟りで俺だばこんただ病気になってしまった。ひばなんとせばえエ」と言いました。それだけ言い終わるところと横になって眠ってしまいました。クマ婆さんが静かに息を引き取ったのは、それから1ヶ月後のことでした。

それから半年後、輝男が胃がんで入院することになりました。胃の80%を切除し、2年間自宅で療養していましたが、食道、に転移し、入退院を繰り返した後、最後は肺がんということで、季節外れの大雪の日病院で息を引き取りました。

世にも不思議な出来事があったのはその後です。輝男が亡くなって、和子は広い家に一人で住むことになりました。輝男が亡くなってから3ヶ月経ったある日、夜9時になったので、和子が寝室に行ったら、布団に入ったら、雨戸のほうでなにかトントンとノックをするような音がしました。障子をあけてみると、大きな青大将が雨戸を昇って来て、鎌首でノックをしていたのです。蛇はまるで「私を中に入れて下さい」とでもいうように、和子をじっとみつめていました。和子は、これは輝男の生まれ変わりで、私に会いに来たのだと思いましたので、「おめエだばおれど一緒に寝て来てたどごだか? だどもなかさひで(入れて)やるごとだばでぎねエ、まず自分の寝どこさ帰って一人で寝れ」と言って聞かせました。蛇はうなだれるようにしてすすごごと帰っていきました。その後も蛇は毎晩のように決まった時間に和子の部屋の雨戸にやってきました。その都度和子は、帰るように言って聞かせたそうです。それが半年も続きましたが、冬になるとさすがに来なくなりました。そしてその翌年にはもう蛇は来なかったそうです。

《説明》

これは、昭和60年～平成10年ごろの話だそうです。教えてくれたのは私より15歳年上の女性で、まだボケるような年齢でもなくしっかりした方でしたので、実際に有ったことだと思っています。昔からどこの家にも、大きな蛇が住みついでいて、その家を災厄から守ってくれていると言われておりました。それをあろうことか殺してしまったのですから、その家に良くないことが起きてしまったのは当然かもしれません。ただ、蛇が重病のクマ婆さんに起き上がって輝男さんを叱責するような力を与えたり、夜、人家を訪れて雨戸をノックした、というのはどう解釈したらよいのでしょうか。もしかしたら、蛇の知能というのは私たちが考えていたようなレベルではないのかも知れません。